

なぜ宇陀で 万葉歌が詠われたのか



『万葉集』が新元号「令和」の典拠として、注目を集めています。
宇陀市にも万葉歌ゆかりの地があり、それぞれに万葉歌碑が建立されています。その数 18 首 16 か所。
今回の特集では、その万葉集と宇陀との関わりについて紹介します。
これをきっかけに、万葉集を知らなかった方にも少しでも関心を持っていただき、万葉集と宇陀市の魅力を再発見してほしいと思います。

市役所 1 階フロアーに展示している壁画
【推古天皇の薨御】
星薬科大学（東京都）所蔵のレプリカ

問文化財課（☎ 82・3976 / IP ☎ 88・9365）

当時の文官、
女官はこんな
服を着ていた
んですよ。（^^）

万葉集とは

■日本最古の歌集

『万葉集』とは、日本最古の歌集。全 20 巻からなり、1300 年（1400 年前）の歌、約 4500 首がおさめられています。

作者は天皇や貴族だけでなく、兵士や農民までいろいろな立場の人たちですが、半数は「作者未詳歌」と言われ、作者が分かっていません。歌が詠まれた地域は、東北から九州に至る日本各地におよびます。

『万葉集』は、まだ平仮名がない時代に書かれたので、全文が漢字で書かれています。また、原本はなく、いくつもの写本（手書きで書き写したもの）で伝えられています。現在、最も古い写本は、平安時代・11 世紀後半頃の「桂本万葉集」と呼ばれているものですが、巻 4 の一部が残っているだけです。20 巻すべてが揃った最も古い写本は、鎌倉時代後期の「西本願寺本万葉集」と呼ばれているものです。



文化財課 薄木・藤田



宇陀の語り部にお聞きしました

■宇陀市観光ボランティアガイドの会
奥谷 恵子さん（大宇陀在住）

宇陀の地は、万葉集きっての歌人とたたえられた柿本人麻呂と山部赤人ゆかりの地で、たくさんの万葉歌碑が建てられています。

なかでも人麻呂の「東の野にかぎろひの…」の歌は中学校の教科書に採用されることも多く、広く人々に知られ親しまれています。

女優の檀ふみさんが、NHKの番組「日めくり万葉集」の朗読を担当されていたころ、上皇（先の天皇）さまに、最も好きな万葉歌を尋ねたとき、この「東の…」の歌と答えられたとそうです。なんと光栄なことでしょう。

かぎろひの丘には、昭和15年に建てられたこの歌の歌碑があります。揮（き）ごう（毛筆で書くこと）は歌人で国文学者の佐佐木信綱氏ですが、佐佐木氏は大宇陀中学校の校歌も作詞してくださっています。

また、中央公民館には、中山正實画伯がこの歌をテーマとして描かれた壁画「阿騎野の朝」が掲げられています。

年に一度程度開催される「かぎろひを観る会」では、1300年を超える昔をしのびます。みんなで「かぎろひ」の立つのを待ちませんか。お待ちしております。

※宇陀市観光ボランティアガイドの会は、現在55人の会員で活動し、本市を訪れる方に市内の観光地や史跡、文化財等を案内していただいています。



なぜ宇陀で万葉歌が詠われたのか

■自然豊かな土地と水銀

宇陀では、推古19年（611）5月5日、日本最初の「薬獵（くすりがり）」が行われました。

豊富に生息する鳥獣、多種多様な植物の生育など、宇陀の自然の豊かさから、すでに5世紀後半には宋人部（鳥獣の肉を料理する職業）や鳥養部（鳥類の飼育をした職業）などと呼ばれる職業集団が宇陀に設置されており、宇陀の地が当時の皇族の獵場（かりば）となっていました。このような恵まれた環境であつたからこそ、7世紀前半には、「薬獵」が行われることとなったのでしよう。

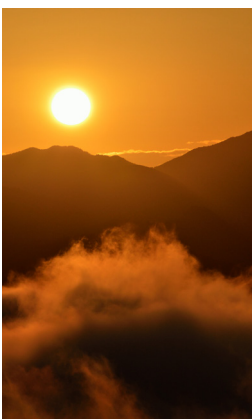
「薬獵」が行われることとなったもうひとつの理由は、宇陀と神仙思想との結びつきが考えられます。神仙思想とは、超自然的な楽園と、

そこに住む神通力をもった神や仙人の存在を信じる中国古代の考えで、この信仰に基づいて不老不死の薬を探し求め、長寿を全うするための方法が研究されていました。

その考え方の背景には、宇陀で取れた水銀の存在が考えられます。この水銀の歴史は古く、すでに3〜4世紀には、大量の水銀朱（朱色の高級な色素）が古墳の埋葬施設などに用いられていました。

水銀は、不老不死によく効く薬とされる仙薬（不老不死の仙人になるという薬）の主な成分ですが、猛毒であるため、これをそのまま摂ることはできません。そこで水銀が取れるところの水、鳥獣の肉、野草、山菜、キノコ、果物などを摂ることで、間接的に水銀を摂ると考えられるようになったのでしよう。

つまり、宇陀の地には、聖なる力があると考えられていたのです。このような考え方があつたからこそ、宇陀の地が「皇族の獵場」とされ、皇族たちがここを訪れ、そこでいくつもの万葉歌が詠まれたのです。



宇陀市には こんな歌碑があるよ

柿本人麻呂の秀歌

万葉集に残っている歌は基本的に、五・七・五・七・七の短歌ですが、中には長歌（五・七を繰り返して最後に七）や旋頭歌（五・七・五・七・七）があります。

万葉集のなかでも、7世紀後半の万葉歌人（宮廷歌人）である柿本人麻呂が詠んだ歌は、よく知られているところですが、『万葉集』巻1には、人麻呂の歌、5首（45～49）が続けておさめられています。

これらの歌は、持統6年（692）に軽皇子が「阿騎野」へ遊獵に來た時に詠まれたものです。

この「阿騎野」は、皇族たちにとって重要な場所のひとつでした。人麻呂が宇陀で詠んだと考えられているのは8首、市内には5つの歌碑があります。そのうち大宇陀にある4つの歌碑を紹介します。

その当時の情景を思い浮かべながら読んでみてはいかがでしょう。



うだ記紀・万葉プロジェクトの
マスコットキャラクター
「天平八っぴー」

■この歌は

「阿騎の野に今夜、旅寝をする人々は、のびのびと身を横たえて眠っているであろうか、いや眠れやしないのだ。草壁皇子がいらいっしやつた昔の事が色々と思ひ出されて」と解釈されています。

阿騎の野に

宿る旅人うち靡き
眠も寝らめやも
いにしへ思ふに



場所：大宇陀迫間 阿紀神社
(巻 1-46)

■この歌は

「阿騎の野は、草を刈る荒野ではあるが、亡くなられた草壁皇子の記念の地・思い出の地として、私たちはやって来た」と解釈されています。



ま草刈る
荒野にはあれど
黄葉の過ぎにし君が
形見とぞ来し

場所：大宇陀上新 神楽岡神社
(巻 1-47)

草壁皇子（662～689） 天武天皇の第2皇子。母は持統天皇。壬申の乱（672）の時は、父母とともに吉野から宇陀を経て東国へ赴いた。天武9年（680）、天武天皇の菟田吾城に行幸に同行。天智・天武の諸皇子の中でも筆頭格であったが、病気のため、即位することなく、亡くなる。

軽皇子（683～707） 天武天皇の孫。草壁皇子の第2子。持統6年（692）、阿騎野で遊獵。持統11年（697）2月に皇太子となり、同年8月に即位し、文武天皇（在位697～707）となる。

ひむがし
東の野にかぎろひの
立つ見えて
かへり見すれば
月かたぶきぬ



場所：大宇陀迫間 かぎろひの丘
(巻 1-48)

■この歌は

厳冬のよく晴れた夜明け前に、東方の空にさしてくる明け方の光で、表現できないほどの美しい色に染まる一瞬が「かぎろひ」と考えられています。
「東方の野には曙の光のさしそめるのが見えて、西を振返ると月が傾いて淡い光をたたえている」と解釈されています。

■この歌は

「亡くなられた日並皇子が馬を並べて御獵（狩り）に出かけになった時刻が今迫ってくる」と詠んだのです。
懐かしい、また、今は亡き草壁皇子が馬を並べ、走らせ狩りをした時のように、いよいよ、その時がやってきたのです。
※日並皇子は草壁皇子のことです

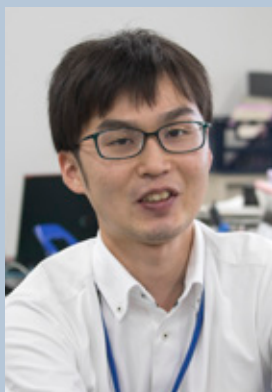
ひなみし
日並の
皇子の命の馬並めて
み獵立たしし
時は来向ふ



場所：大宇陀迫間 大宇陀地域事務所
(巻 1-49)

担当者がおすすめる歌

■場所：榛原萩原 鳥見山公園
(巻10-2346)



文化財課 北島 俊

うかねらふ
跡見山雪のいちしろく
恋ひば妹が名
人知らむかも

選んだ理由は、現在でも見られる風景が出てくることです。歌の中で出てくる「跡見山」は、現在の鳥見山です。鳥見山は、現在でも雪が積もります。だから歌を書いた風景が、容易に想像できるのではないのでしょうか。

また、これが恋の歌で作者の心情がわかりやすく、想像しやすいことです。作者は不明ですが、歌の内容をみると、作者に想い人がいたことが分かります。また作者が想い人に態度をはっきりしたらいいのだろうか、迷っていることも分かります。

鳥見山に一度登って、古代の人の心情に想い馳せてみては、いかがでしょうか？※桜井市の鳥見山である説もあります。

宇陀市ゆかりの偉人 (万葉集に携わった人たち)

かきのもとのひとまる
柿本人麻呂
(7世紀～8世紀)

かぎろひを詠んだ
万葉ヒットメーカー



柿本人麻呂像
(大宇陀中庄)

てんむちょう 天武朝のころからもんむちょう 文武朝にかけて活躍した宮廷歌人。後世、歌聖とたたえられる。持統6年(692)、軽皇子に随行し、宇陀の阿騎野を訪れた際、「東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ」と詠った。これは万葉集の中でも秀歌のひとつに数えられる。



やまべのあかひと
山部赤人
(8世紀)

万葉集の看板歌人



奈良時代の歌人で三十六歌仙の一人。叙景歌人、自然歌人とも称され、自然を詠む歌に優れる。山辺三には、山部赤人墓と伝わる苔むした五輪塔がある。



伝山部赤人墓の五輪塔
(榛原山辺三)

もとおりのりなが
本居宣長
(18世紀)

日本古代研究の
先頭ランナー



国学者で文献学者で医師。医業のかたわら『古事記』をはじめとする古典の研究をすすめた。明和9年(1772)に松坂をたつて吉野・大和を巡歴した際、宇陀の萩原宿に泊まったとする記述が「菅笠日記」にも見える。また本居宣長の弟子で養子でもある本居大平の「餌袋日記」という紀行文にも萩原に宿ったときの記述が残されている。



あぶらや (榛原萩原)

宇陀市の万葉に関わる イベントなど

一度は見てみたい景色

かぎろひを観る会



「東の野にかぎろひの
立つ見えて かへり見すれば
月かたぶきぬ」

持続6年（692）の旧暦11月17日に、柿本人麻呂が詠んだといわれるこの秀歌を体感する恒例の催し。

たき火を囲みながら、「かぎろひ」が現れるのを待ちましよう。

【日時】 12月13日（金） 予定
午前4時～7時頃

【場所】 かぎろひの丘万葉公園
（大宇陀迫間）

【問い合わせ】
宇陀市観光協会（商工観光課内）
TEL 82・2457 / IP 88・9081

気になったところをチェック

ホームページも充実



今回の特集で紹介しきれなかった万葉歌碑や、記紀・万葉、記紀ゆかりの舞台、宇陀市の歴史を彩った「おとこたち・おんなたち」などを、宇陀市のホームページの特設サイト『うだ記紀・万葉』で紹介しています。イベント情報やお知らせ情報なども随時紹介しています。宇陀市の歴史を知り、現在のその場所に行ってみると不思議な感覚になるかもしれません。

詳しく知りたい方や少しでも気になった方は、ぜひご覧ください。



うだ記紀・万葉

検索

リーフレットを手にその場所を訪れてみては

冊子やリーフレット

宇陀市の記紀・万葉に関わる冊子やリーフレットもたくさん作成しています。

「宇陀の記紀万葉（写真左上）」（定価一冊 200円）は、市内の万葉歌碑を中心に記紀万葉の時代を紹介しています。市内在住の方に書や画で作成していただきました。観光案内所等で販売しています。

そのほかの冊子やリーフレットも手に取ってみませんか。

